



大原美術館



倉敷考古館

1925 百年前の考古学―好古から考古へ

このたび、1925年を共通のテーマとして、大原美術館と倉敷考古館は共同で展覧会を開催します。

大原美術館の「ピカソ・フジタ・ヤクシジームすび100年前」は同時代に活躍した三人の表現者を点として結んだ展示会です。これと同時に開催する倉敷考古館の「百年前の考古学」は、百年前の大正時代の遺跡ではなく、当時の考古学が一般に広まっていく様子を取り上げていきます。

そもそも考古学とは、明治時代の初め、日本に招かれていた外国の技術者や学者によってもたらされた欧米の学問でした。動物学者モース（1838～1925）による神奈川県の大森貝塚の発見から日本の考古学研究が始まります。それより以前の江戸時代には「好古家」と呼ばれる、古きを好む趣味人が古物蒐集を行っていました。モースと同時期に来日していた、外交官であり考古学者であったシーボルト（1908～1995

2）によりArchaeologyの訳語として「考古学」という言葉が用いられ、「好古」から、古きを考察する学問「考古」学となり、学術的な遺跡の発掘調査と研究が発展します。まず研究の中心となったのは大学や帝国博物館など一部のアカデミアでした。一方、地方においては好古的な蒐集が主流であり、倉敷でも、われわれがよく知る人物が発掘を行っていたようです。

児島虎次郎（1881～1929）がエジプトやオリエント、中国、朝鮮などの古美術品に強く興味を抱いていたことは周知の通りですが、住居兼アトリエの室内写真に目を凝らすと、カーテンの掛かる扉の上に須恵器という日本の古墳時代の土器も見えます。大原美術館で研究を進めている児島虎次郎日記の内容を確認すると、しばしば古墳を発掘して土器を持ち帰り、接合など行った記録がありました。児島が酒津に住居兼アトリエを構えた頃、周辺は1911（明治44）年から1925（大正

15）年まで行われた高梁川（たかはし）東西用水工事のさなかでした。この東西用水の事務所にはアール・デコの装飾も見られます。

当時の写真を見ると、近隣では樹木の伐採や開墾が行われており、遺跡を発見しやすい環境であったかもしれません。1925年以降、岡山では在野（ざいや）での考古学研究が盛んになっていきますが、児島虎次郎の蒐集は、当時の埋蔵文化財に対する関わり方の一面をよく表しています。

2025年、倉敷考古館が大原美術館と財団統合して1年になります。異なる分野の研究が1925年という糸により新たな発見へとつながりました。写真に写る土器は、なんと倉敷考古館に収蔵されていたのです。この児島の愛蔵品の土器を中心として、このたびの展示では倉敷の好古、考古の資料を展示いたします。美術館を楽しまれた後は、倉敷考古館にて児島虎次郎の推し土器を是非ご覧になってください。

（公益財団法人大原芸術財団

研究員 伴 祐子 記）



▲ 児島虎次郎の住居兼アトリエ